

大足宝頂山石刻の思想史的考察

——父母恩重経変図と大方便仏報恩経変図をめぐる——

鎌田 茂雄

一序

中国の四川省の大足県には多くの石刻や摩崖造像がある。宝頂山、北山、南山、舒成岩、塔兒山、古仏洞、石門山、陳家岩、七拱橋、仏安橋、石篆山、仙仏岩、妙高山などがそれである。

これらの多くの石刻や摩崖造像の中でその規模や造像からいって、もつとも有名なのが宝頂山と北山である。本致ではこの中の宝頂山石刻の中の二つの摩崖造像をとりあげ、その思想史的背景を考察したいと思う。

宝頂山摩崖造像は大足県城の東北約一五キロの宝頂山にある。大足宝頂山の摩崖造像は唐代に創建され、宋代まで継続して造像されたといわれている。明の洪熙元年（一四二五）の碑刻である「重修宝頂山聖寿院記」によると、宝頂山石窟の創始人は趙智鳳であり、南宋の淳熙十六年（一一七九）、山の前岩、後洞に仏像を刻したというが、前岩は大仏湾、後洞は小仏湾を指している。宝頂山造像は重要な、柳本尊の密教の道場である。石刻はまず小仏湾に彫造され、つぎに大仏湾に彫造され、数十年を経て完成されたといわれる。

小仏湾の造像は現在ほとんど廃毀されたが、毗盧庵の中の柳本尊行化図及び地獄変相図の浮彫と、庵の前には

石塔が残されている。その三層石塔の上層の四面には彫像が、下層には経目が刻されている。塔には趙智鳳が造つた新字数十字が刻されている。

大仏湾は長さ約五〇〇メートル、高さは一五―三〇メートル、その東、南、北の三崖に造像されている。二つの石窟のほかはすべて摩崖造像である。主なものには六道輪廻、広大宝楼閣、華嚴三聖像、千手千眼観世音、釈迦誕生、九竜浴太子、涅槃像、孔雀明王経変、毗盧道場、父母恩重経変、大方便仏報恩経変、観無量寿仏経変、六耗図、地獄変、柳本尊行化図、十大明王、円覚洞、牧牛道場などがある。これらの造像には、密教、禅宗、儒教などの各種の思想が表現されており、中国雕刻史や宗教思想史研究の重要な資料となっている。

本論文においては、宝頂山石刻の中の父母恩重経変図と大方便仏報恩経変図の造像をとりあげその思想史的意義を考究したいと思う。

二 父母恩重経変図とその背景

まず父母恩重経変図の現状を『大足石刻内容総録』^(三)によって説明しておきたい。

仏龕の高さは六・五メートル、幅十四・五メートルあるのが父母恩重経変図像である。仏龕は三層よりなり、上層には七仏像が、中層には父母恩重経変図像が、下層の右壁には阿鼻地獄図があるが、左壁には像はない。

上層の七仏像は、(一)毘婆尸仏、(二)尸棄仏、(三)毘舍浮仏、(四)拘留孫仏、(五)拘那含牟尼佛、(六)迦葉仏、(七)釈迦牟尼仏の過去七仏である。

中層は父母恩重経変図像で十一組の人物図像から成り立っている。この層の真中には「投仏祈求嗣息図」があ

る。一組の夫婦が仏像の前で相對して立ち、男像は香爐を捧げ、女像は香爐の中に香を焚き、二人とも敬虔な態度で仏に向つて子供を授かるように祈願をこめてゐる。

この二像の前には碑記があり、その碑記にはつぎのように書かれてゐる。

賜紫慈覺大師。□家□頌曰。血非未生前。疑然一相圓。釋□□□會。迦□□能伝。父母同香火。求生孝順兒。提防年老日。起坐要扶持。父母皆成仏。綿□法界如。爾時心願足。方乃證无餘。有得非為得。無功始是功。千憶(カ)千暝外。元是旧家風。この投仏祈求嗣息図の両側に父母十恩図が東壁と西壁に配されている。

(一) 懐胎守護恩図(東壁一)

図像は一人の孕んだ婦人が坐っており、その傍に両手に茶を捧げた一人の侍女がいる。そこにはつぎのような題記が書かれている。

第一懐担(胎カ)守護恩。禪師頌曰。慈母懐担(胎カ)□(日カ)。全身重□□(如鉄カ)。□(面カ)黃如有病。動轉亦□(艱カ)難。

(二) 臨産受苦難図(西壁一)

図像は一人の臨産婦が脚を開いて立つており、右手は腹を護り、左手は垂れ、顔には苦痛を現わしている。産婦の背後には一人の侍女が立ち、両手で産婦の両脇を支えている。目の前には跪坐した産婆が袖をまくつて生まれてくるのを待ちかまえている。産婆の背後には、産婦の夫が手に経書を持って顔に不安を現わして立つてゐる。その上につぎの題記が書かれてゐる。

第二□□□□(臨産受苦カ)恩。慈覺頌曰。□□(父母カ)慈親苦。□(令カ)人眼泪□(流カ)。知恩□□□□(兒カ)取出胎時。(以下略)。

(三) 生子忘懷恩図(東壁二)

図像は一組の夫婦が笑みを浮べて相對して立っており、妻は左手に嬰兒を抱き、夫の左手は妻の手をとり、夫婦が子を得た喜びの情景をあらわしている。題記にはつぎのように書かれている。

第三□□生子忘懷恩。慈覺頌曰。初見嬰兒面。双親笑點頭。従前憂苦□(情カ)。到此一時休。

(四) 咽苦吐甘恩図(西壁二)

図像は母親が坐り、左手に子供を抱き、自分の膝の上に置き、子供は右手に餅を持って母親の胸の前においている。題記はつぎのごとくである。

第四□(咽カ)苦吐甘恩。慈覺頌曰。□□(甘讓カ)兒子□(食カ)。□□(苦留カ)自家□吃。不世知恩少。他時報德難。

(五) 推乾就湿恩図(東壁三)

図像は母親が床に臥し、右腕を枕にして子供の頭を支え、左手は子供の左脚を開いている。子供が睡って放尿すると、母親は漏れて湿ったところへ体を移し、子供に乾いた場所を与える。題記はつぎの如くである。

第五推乾就湿恩。慈覺頌曰。乾処讓兒臥。□(自カ)身□□□(睡湿処カ)。抑誰□□□。諸仏亦何偏。

(六) 哺乳養育恩図(西壁三)

図像は、母親が正面して坐り、襟を開いて両乳を出し、子供は立って母の胸にしがみつき、右手は母の左の肩にかけ、左手は母の右乳をもてあそび、口は左の乳を含んで母乳を吸っている。題記はつぎの如くである。

第六□□□□乳哺養育恩。慈覺禪師宗饋頌曰。□(乳カ)哺無時節。□中豈暫離。不愁脂肉尽。惟恐小兒飢。

(七) 洗濯不淨恩図(東壁四)

図像は、母親は坐つて洗濯し、父親は母の肩の上で遊んでいる子供を抱きかかえている。右側には大きな子供が手に玩具を持つて弟をあやしている。父親と子供の肩から上の部分が残っている。題記はつぎの如くである。

第七□(洗カ) □□□(不浄恩カ)。□(慈) 覚大師頌。□(小カ) 児□□□(多齷齪カ)。□(襁カ) 襦□(无カ) 時乾。
…… 児身多□□(臟汚カ)。洗□□□□(濯不浄時カ) —— (以下略)。

(八) 為造恋業恩図 (西壁四)

図像は机があり、三人が坐っている。真中には少年が、両側には老人と中年男子が坐っている。机の側には男女が立ち、男は手に棒を持ち、女は袖をまくっている。その前には豚と盆と鋭い刀が置かれ、宴席のために豚が殺されようとしている。題記はつぎの如くである。

第八為造恋業恩。古徳頌云。養兒方長大。婚嫁是尋常。筵会多殺害。罪業使誰当。

(九) 遠行憶念恩図 (東壁五)

図像は、老年の夫婦が、遠くに赴く子と離別しようとする光景が造像されている。老夫婦は淳々と子供を諭している。題記はつぎの如くである。

第九遠行憶念恩。□□頌曰。□□下為兒日。三年豈離后。□何千里□(遠カ)。出必□□□(多小心カ)。恐倚門□□(二老カ) 婦来莫太遲。

(一〇) 究竟憐憫恩図 (西壁五)

図像は老年の父母が坐り、子供は両親の前で拱手して坐っている。老父は右手で教え諭している。題記はつぎの如くである。

第十究竟憐憫恩。頌曰。百歳惟憫八十兒。不捨作鬼也憫之。(以下略)。

下層の西壁の第四と第五の図像の下には阿鼻地獄が刻されている。図像の中では悪鬼が手に瓢(ひしゃく)を持って罪人の口に熔けた銅水を灌ごうとするが、罪人はそれを拒んでいる。その傍には枷をつけた罪人がおり、その両側には二匹の毒蛇が、口から火焰を吐いてその罪人を焼こうとしている。図像の右側には大きな石があり、その石の下に人の頭がある。人の頭の右側に犬がおり、人の頭に向かって火焰を噴きかけている。この題記はつぎの如くである。

悪友熏習。造作非理。生遭王法。死入阿鼻。

この父母恩重経変の摩崖造像の岩壁には別に七つの題記があり、大蔵経などの經典の言葉が書かれているという。

この父母恩重経変像は父母が子女を養育する苦勞を雕像化したものであるが、それが仏前祈嗣図、懐胎守護恩図、臨産受苦恩図、生子忘憂恩図、咽苦吐甘恩図、推乾就湿恩図、乳哺養育恩図、洗濯不淨恩図、為造悪業恩図、遠行憶念恩図、究竟憐憫恩図などの十一龕の雕像となっているが、これらの雕像は実際の生活に即して説かれた孝道の理念の表現である。

宝頂山の父母恩重経変像成立の背景については、竜晦氏の研究^三がある。その研究によりながらその背景を考えてみたい。

父母恩重経変像の十重恩の内容は、基本的には敦煌曲中の『十恩徳』『十種縁』『孝順楽』と一致するという。ただし第一龕の「投仏祈求嗣息」の造像は『十恩徳』『十種縁』『孝順楽』のいずれにもないという。この「投仏祈求嗣息」の下の刻文に「父母為香火、求生孝順兒、提防年老日、起坐要扶持」とあるのは古代の中国社会以来

の伝統であり、後継男子を願い求めることは中国仏教の中にも受容されて「投仏祈求嗣息」の雕像が造られたのである。

第一恩の「懐胎守護恩」は『十恩徳』の第一「懐躬守護恩」に説かれた、

説着氣不舒。慈親身重力全無。起坐待人扶。如恙病。喘息羸。紅顏漸覺焦枯。報恩十月莫相辜。仏且勸門徒。

の歌詞と符合している。ちなみに『十恩徳』の内容は父母の恩、特に母親が子女を出産養育するための苦勞を叙し、母への報恩をすすめた勸世体の歌曲で、第一恩から第十恩までを列挙した数え歌の形をとったものである。また『父母恩重経講经文』^(五)に説かれる、

経云。阿嬢懷子。十月之中。起坐不安。如擎重擔。飲食不下。如長病人。

とも符号するともいう。

また『十種縁』の第一である

父母恩重十種縁。第一懐躬受苦難。不知是男還是女。慈悲恩愛与天連。

を見ると、男を生むことを重んじ、女を生むことを軽んじていることがわかる。男を生まなければならないのに「不知是男還是女」ということを考えると、当然、懐胎した女性の顔には憂愁の徴効があらわれるはずであり、それが「懐胎守護恩」の雕像にも現れているという。

また『孝順樂』の第一に、

起初第一是懐胎。阿娘日夜数般災。日夜只憂分離去。思量争不淚漣漣。

とある歌文とも「懐胎守護恩」の主旨は一致しているという。

父母恩重経変図の第二恩である「臨産受苦恩」は『十恩徳』の第二「臨産受苦恩」の歌文、

今日説向君。苦哉母腹似刀分。楚痛不忍聞。如屠割。血成盆。性命只恐難存。勸君問取釈迦尊。慈母報無門。とその内容において符号するものがあるという。臨産の受苦を軽くするためには釈迦尊に問取せよというところに、『十恩徳』が仏教的な勸善書であることがわかる。

『父母恩重経講经文』では、

経云。月満生時。受諸痛苦。須臾好悪。只怒无常。如煞猪羊。血流洒地。

とある。

以下、竜晦氏は宝頂山石刻の父母恩重経変図の十恩の中の第三生子忘憂恩、第四嘔苦吐甘恩、第五推乾就湿恩、第六哺乳養育恩、第七洗濯不浄恩、第八為造悪業恩、第九遠行憶念恩、第十究竟憐憫恩に至る各恩について、『十恩徳』『十種縁』『孝順楽』の記述と詳細に比較、検討し、その異同を明らかにしている。ちなみに父母恩重経変図の十恩と、『十恩徳』の十恩の名称を比較するとつぎの如くである。

父母恩重経変図

十恩徳

投仏祈求嗣息

なし

(一) 懐胎守護恩

(一) 懐躬守護恩

(二) 臨産受苦恩

(二) 臨産受苦恩

(三) 生子忘憂恩

(三) 生子忘憂恩

(四) 咽苦吐甘恩

(四) 咽苦吐甘恩

(五) 推乾就湿恩

(五) 乳抱養育恩

(六) 哺乳養育恩

(六) 廻乾就湿恩

(七) 洗濯不淨恩 (七) 洗濯不淨恩

(八) 為造惡業恩 (八) 造作惡業恩

(九) 遠行憶念恩 (九) 遠行憶念恩

(一〇) 究竟憐憫恩 (一〇) 冤憎會憫恩

父母恩重經變図の雕造の背景となったのが『十恩徳』と『十種縁』『孝順樂』『父母恩重經講經文』であったことは明らかである。

まず『父母恩重經講經文』の成立について考えてみたい。P・二四一八号の卷末の題記には、

天成二年八月七日 一艺書

とあり、『講經文』が天成二年(九二七)に書写されたことがわかる。これによって『父母恩重經講文』は九二七年以前に作られたことが明らかである。

周知のように『父母恩重經』には、各種の異本があるが、禿氏祐祥氏の論攷^(六)によると、つぎの六種があるという。

(一) 丁蘭本。『開元釈教録^(七)』卷十八に収録されている。現存せず。

(二) 古本。宗密の『孟蘭盆經疏』に引用したもの。敦煌本と類似しており、丁蘭本の一部に改作を加えたもの。円仁の『入唐新求聖教目録』に西明寺沙門体清の『父母恩重經疏』一卷(大正五十五・一〇八三中)を著録しているが、現存しない。

(三) 増益本。後世広く行われたもの。高麗写本の卷中に当り、つぎの注疏があるという。

鈔二卷 亮汰撰 延宝三年

頭書二卷 亡名撰 元祿十年

諺解一卷 亮典撰

直解二卷 玄貞撰

鼓吹七卷 玄貞撰

岡極抄二卷 真賢撰 貞亨二年

和解二卷 雄辨撰

(四) 高麗本。高麗写本の卷上に収めるもの。つぎの大報本の原形と考えられるという。

(五) 大報本。承德三年(一〇九九)、寛永二十年(一六四三)の刊本を伝え、絵入りになっているから図絵本と云われている。朝鮮で作られた正統十二年(一四四七)の写本、万歴十年(一五八二)・康熙二十六年(一六八七)の写本があるという。刊本は絵入諺文附である。

(六) 省略本。高麗写本の巻下に収められている短篇の経文である。

この中で宗密が依用したと思われる(二)古本は敦煌本として大正八十五巻に収録されている。この古本にもとづいて講経文として作成されたのが『父母恩重経講経文』であり、それによって『父母恩重経』が深く民衆の中に滲透したものと思われる。

これに対して『十恩徳』は北京図書館蔵本、大英博物館蔵本、パリ国立図書館蔵本、ロシア蔵本など多くの種類があるといわれるが、S・〇二八九号の背面には、「時在太平興国五年」と書かれており、本書が九八〇年以前に成立したことがわかる。

そのほか大足宝頂山石刻の父母恩重経変図の造像に影響を与えたと思われる『十種縁』(S・二二二〇四号)『孝

順樂』(P・二八四三号)なども、その内容が『十恩德』に類似しているので、これらの孝道に関する敦煌写本の歌曲も晩唐から五代にかけて成立したものとされている。これらの文献が成立した後に、その影響を受けて父母恩重経変図が雕造されたのではないかと、竜晦氏は推定している。

ところで秦明智氏の報告^(八)によれば、甘肅省博物館に北宋の仏経故事画の一つ「報父母恩重経変」が収蔵されているという。この経変図は敦煌石室より発見されたものである。この仏画は縦一八二センチ、横一二七センチの絹本で、仏、菩薩、在俗者一一〇余人が描かれており、題記もあるという。

仏像絵の真中の上部には七仏が描かれているが、その結跏趺坐した七仏の傍に仏名が書かれているという。その仏名は(一)南无毗婆尸仏、(二)南无尸棄仏、(三)南无毗舍浮仏、(四)南无拘留孫仏、(五)南无俱那含牟尼仏、(六)南无迦葉仏、(七)南无釈迦牟尼仏であるという。さらに蔵宝、珠寶、兵宝、□宝、玉女宝、象宝、輪宝と題された七宝が描かれているという。

中央部には説法図が描かれているが、中央の一仏は蓮華座の上に坐り、手は説法印を結んでいる。左右に二菩薩が配され、その側面と前面には十弟子と十二菩薩が描かれている。

説法図の下には経変文と發願文とが書かれ、その両側には聖衆が左右二列に分かれて描かれている。左側の上列には四人の善男子と五人の比丘が並び、榜題には「諸優婆塞来会時」「比丘衆来会聽法時」と書かれ、下列には地藏菩薩と、侍立している二童子と、跪坐している一人の比丘が描かれ、榜題には「南無大慈大悲救苦菩薩摩訶薩」とある。

右側の上列には四人の婦女と五人の比丘尼が描かれ、榜題には「優婆夷衆赴会時」「比丘尼衆赴会聽法」と書かれており、下列には手に柳の枝を持った菩薩と手香爐を持った老尼、及び二人の供養女が描かれ、榜題には

「故大乘寺阿師子戒行^ニ一心供養」と書かれている。

下層の中央部には経変文が墨書されておりその題名は「仏説報父母恩重経」であり、その経文はつぎの如くである。

如是我聞。一時仏在王舍城耆闍崛山中。与諸比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷・一切諸天人民・諸天竜八部鬼神。皆来^集會。□^一心聽仏説法。瞻仰^尊願。且^不暫捨。仏言。人生在世。父母^為親。非父不生。非母不育。乃至仏告阿難。此経名^為父母恩重経。若有一切衆生。能^為父母修福造経焼香等。是人能報父母之恩。乃至一切衆生。聞^經歡喜。發菩提心。嚶哭動地。泪^下如雨。五^体投地頂礼。仏是歡喜。奉祈。(闕文は経文によつて補う。泰明智論文、付録一)

この経文を敦煌本『父母恩重経』と対照すると、多少文字に異同があるがほとんど同じといつてよい。つぎに発願文は「絵仏邈真紀」と題されており、その全文はつぎの如くである。

絵仏邈真紀

若夫夫妙覺常身。等虚空而謹寂。凡庸幻質。□起滅以輪回。未帰解脱之源。皆有榮枯之理。故我釈迦大聖示滅于双樹之林。魯国仲尼凶掩于兩楹之夢。豈況浮軀。過能免斯者焉。即□法律戒。行遷世矣。□靈童年舍俗。齷歲求真。白業慕于伽藍。青緑墜于仏地。七□嚴淨。八敬精金。戒律謹^而无^虧。□論明^而□曉。思示天堂。□于地里。□□□□□□。百療治于莫愈。嗚呼永別而難逢。哽噎何時而再睹。遂命良工巧匠。彩画装金。上^圖仏会而千融。下邈真儀而一样。逐斯福利。逐仏逍遙。随喜見聞。咸登覺道。

如来常軀。尚滅双林。凡庸幻質。生死古今。上^圖仏会。下写真心。建斯福分。不墜深沈。

于時淳化二年歲次辛卯五月廿二日紀。(泰明智氏論文、付録二)

この発願分の最後には、「于時淳化二年歲次辛卯五月廿二日紀」とあり、北宋の淳化二年(九九一)に書かれ

たことがわかる。

経変故事は説法図を中心としてその周圍に描かれており、それぞれの絵には榜題がつけられている。その榜題はつぎの如くであるという。

- (一) 父母之恩、昊天罔極。(大正八十五・一四〇三下)
- (二) 人生在世、父母為親、非父不生、非母不養(同一四〇三中)
- (三) 十月將滿、産後母子俱顯、洗浴時。(同一四〇三中)
- (四) 母為其子開懷出乳、以乳与之時。(同一四〇三下)
- (五) 或在欄車、搖頭弄腦時。(同一四〇三下)
- (六) 父母將子隨行加頸時。
- (七) 父母養育卧在欄車時。(同一四〇三中下)
- (八) 或復曳腹隨行、嗚呼向母時。(同一四〇三下)
- (九) 父母懷抱、含笑未語和弄聲時。(同一四〇三下)
- (一〇) 或得果餅、以与其子、一遇不得僑啼伴哭。(同一四〇三下)
- (一一) 孝子不僑、必有慈順。(同一四〇三下)
- (一二) 僑子不孝、必有五穢(穢)(同一四〇三下)
- (一三) 父母年老、氣力衰微時。(同一四〇三下)
- (一四) 得他子女、私房室內共相歡樂。(同一四〇三下)
- (一五) 子亦長大、求索妻時(遂至長大、朋友相隨。同一四〇三下)

以上の十五榜題の文は、敦煌本『仏説父母恩重經』の經文から摘出したものであり、甘肅省博物館蔵の「報父母恩重經變画」に書かれた十五榜題の文は、『仏説父母恩重經』にもとづいたものであることは明らかである。

これに対して大足宝頂山石刻の父母恩重經變画は『十恩德』『十種縁』『孝順樂』などによって雕造されたものであり、「報父母恩重經變画」とは異なる背景から生まれたものであることがわかる。

大足宝頂山石刻の父母恩重經變画の背景となった『十恩德』などの歌曲は、『父母恩重經變文』などと内容上、密接な関連があり、變文と歌曲とは互いに連ねて講唄したり、互いに相補って流行したものであり、仏教の民衆教化のためにそれぞれ大きな役割を果たしたのである。

經典としての『父母恩重經』によりながら、民衆にも理解できる『父母恩重經講經文』がまず成立し、つぎに經文や講經文によりながら成立した『十恩德』などの歌曲が流行し、それらにもとづいて大足宝頂山石刻の父母恩重經變画が造像されたものと思われる。

三 大方便仏報恩經變画とその背景

大足宝頂山石窟の第十五号が父母恩重經變画であるが、第十六号は雷音画であり、つぎの第十七号が大方便仏報恩經變画の石刻である。それは高さ七・一メートル、幅一四・七メートルの摩崖に彫刻されている。

主尊は高さ三・七メートルの釈迦仏の半身像である。背光の中に「切利天宮」と書かれた天宮があり、その中に四体の小菩薩像がある。龕頂の檐には「仮使熱鉄輪于我頂上旋、終不以此苦退失菩提心」と刻されている。

主像の腹部から下は大碑となり「三垂(聖)御制仏牙贊」と名づけられている。碑の高さは二・三八メートル、

幅は二・四メートルある。碑の前面の左右両側に「惟有吾師金骨在」と「曾經百練色長新」の十四字が縦に刻されている。この碑の両側に「大方便仏報恩經」と「釈迦牟尼仏為末世衆生設化法故担父王棺」の二碑がある。主像と碑の両側の壁面に大方便仏報恩經變図と十二種の本生故事図が三層に分れて彫像されている。東壁の上層にはつぎの三種が刻されている。

(一) 釈迦因地行孝証三十二相図。

図像の中に一人の男子が右手で僧人を指して問法し、右の傍には女子が坐り、青年が下で跪いて合掌している。この図像の題記の刻經文と「大方便仏報恩經」(以下「仏報恩經」と略称) 卷七の親近品の經文とを対照してみよう。

刻經文

大藏經云。文殊白仏言。座中菩薩見仏三十二相。八十種好。端正无比。有何因緣。得如是像。仏言。我于世世喜燃灯于仏寺及師長父母前。用是因故。仏身光明。殊妙无比。我于世世来事長父母。四□儀中飲食卧具。由是因故。諸天鬼神普持世間所有珍寶。

以頂上仏三十二相八十種好二相好。是由我初發心堅固菩提。知恩報恩。是故今得无上菩提。

仏報恩經親近品

如是八十種不可思議相好。一一相好復有無量百千種微妙相好。一一相好。皆是菩薩從初發心堅固菩提。知恩報恩修是妙行。

視諸衆生猶如父王。以此因緣。得是種類。使我急得阿耨多羅三藐三菩提。由孝德也。

〔大足石刻研究〕二七四頁)

(二) 釈迦因地行孝剋眼出髓為藥図。

図像は浄飯王が坐り、医者が脈をとり、その左下では忍辱太子(釈迦)が坐り合掌している。旃陀羅が刀を持って立っている。太子は自分の両眼を摘出し、骨髓を切り出すことを命じている。父王の為に薬として奉呈するためである。太子の前には侍者が跪き、盤を捧げて眼球と骨髓を受けている。この題記の刻経文と『仏報恩経』卷三、「論議品」第三の経文を対照するとつぎの如くである。

刻経文

釈迦因地行孝剋眼出骨髓為藥。

大藏経言。忍辱太子知其父王身嬰重病。命在旦夕。

求藥□法。太子問言。藥是何物。大臣答曰。是不

嗔人眼睛及其骨髓。若得此藥。病可得救。太子言。

使父王病得救者。雖百千身。亦不為難。况此穢身

也。

是故今得無上菩提。

(大正三・一六四下―五上)

(中略)

視諸衆生猶如父母。以是因緣獲得二相。

(大正三・一六五中)

仏報恩経論議品

爾時大王身嬰重病。苦惱顛頼命在旦夕。忍辱太子往告諸臣。

父王困篤今當奈何。諸臣聞已心生瞋恚。報太子言。王命不久

何以故。欲求妙藥不可得故。是以當知命去不遠。太子聞已。

心生苦惱悶絶躄地

時六大臣即入静室共謀議言。忍辱太子不除去者我等終不得安隱也。作是念已。第一大臣言。忍辱太子無事可除。一臣復

即呼旋陀羅剎去兩目睛。□出骨髓。爾時大臣合藥
進王。王即病差。太子命終。以牛頭旃檀□□生骨
起塔供養。是知如來行孝報恩。□廣救劫。不可思
議。(『大足石刻研究』二七二頁)

言。我有方便能除去之。即往太子所報太子言。臣向在外。於
六十小國八百聚落中。求覓藥草了不能得。太子問言。所求藥
草爲是何物。大臣報言。太子當知。求藥草者正是從生至終。
不瞋人眼睛及其人髓。若得此藥得全王命。若不得者命在不久。
於諸國土無有此人。太子聞已心生憂惱。即報大臣。今我身者
似是其人。何以故。我從生已來未曾有瞋。大臣言。太子若是
其人者。此事亦難。何以故。天下所重莫若己身。太子言。不
如諸臣所言也。但使父王病得損者。假使捨百千身亦不爲難。
況我今日此穢身也。

(大正三·一三八上)

爾時大臣即呼旃檀羅。斷骨出髓剎其兩目爾時大臣即擣此藥奉
上大王。王即服之病得除差。病既差已。問諸大臣。汝等於何
得此妙藥。除我患苦得全身命。大臣白王。今此藥者忍辱太子
之所辦耳。非諸臣力所堪辦也。王聞是語心驚毛豎。微聲問諸
臣言。忍辱太子今在何所。大臣答言。太子今者在外。身體傷
損命不云遠。王聞是語舉聲大哭。怪哉怪哉。自投於地塵土空
身。如我今者實自無情。云何乃能服此子藥。往到子所其命已
終。王及夫人及諸臣民。無量大衆前後圍遶。其母懊惱投身死
尸。以我宿世有諸過惡。今令子身受是苦也。今我身者何不碎
末如塵。乃令我子喪失身命。爾時父王及諸小王。即以牛頭旃
檀香木。積以成積。闍維太子。所有身骨。復以七寶起塔供養
(大正三·一三八中)

以上の対照によって題記の刻経文は『仏報恩経』論議品の経文を取意引用したものであることがわかる。

(三) 釈迦因地鸚鵡行孝圖

図像は、一人の男が二株の木の下に立ち、左手は一羽の鸚鵡にかけ、右手は鳥を指して問いかけている。この意味は、男は地主であり、稲を取りにきた鸚鵡を捕えたところ、鸚鵡は「盲父母にこの稲を供養するのである」と言った。地主はこれを聞いてその孝行に感動して鸚鵡を放つてやった。この題記の刻経文と元魏西域三蔵吉迦夜共曇曜訳の『雜宝藏経』卷一の(三) 鸚鵡子供養盲父母縁の経文と比較するとつぎの如くなる。

刻経文

大藏雜宝藏経云。有一鸚鵡。父母俱盲。常採花果。先奉父母。時有田主。初種谷時。而作誓言。所種之物。与衆生供。時鸚鵡採取稻穗。以供父母。是時田主按行苗稼。見剪稻穗。忽生嗔怒。網捕鸚鵡。鸚鵡告言。先有好心。施物无吝。如何今日。而見網捕。田主問言。汝所取谷。意復何為。鸚鵡答言。有盲父母。願以奉之。田主歡喜。遂舍而去。尔時世尊而説偈言。善哉鸚鵡有智慧。能懷孝養供父母。

雜宝藏経卷二「鸚鵡子供養盲父母縁」

有二鸚鵡。父母都盲。常取好花菓。先奉父母。爾時有二田主。初種穀時。而作願言。所種之穀。要與衆生而共噉食。時鸚鵡子。以彼田主先有施心。即常於田。採取稻穀。以供父母。是時田主按行苗行。見諸虫鳥揃穀穗一處。瞋恚懊惱。便設羅網。捕得鸚鵡。鸚鵡子言。田主先有好心。施物無吝。由是之故。故我敢來。採取稻穀。如何今者。而見網捕。且田者如母。種子如父。實語如子。田主如王。擁護由己。作是語已。田主歡喜。問鸚鵡言。汝取此穀。竟復爲誰。鸚鵡答言。有盲父母。願以奉之。田主答言。自今已後。常於此取。勿復疑。

我從今日以稻施。任汝供養于二親。如是過去无量事。无有善行而不作。未會有懷□厭惡。以求清淨无上道。(『大足石刻研究』二七二頁)

つぎに東壁の中層には二種の凶像が刻されている。

(一) 釈迦因地割肉供父母図

凶像は、羅睺大臣が左手で須闍提太子(釈迦)を抱き、右手で劍をもつて太子の肉を切りさいている。右の前には太子の母が両手で肉を持ち、太子の臂の上の肉がわずかに残っている。題記はつぎの如くである。

釈迦因地割肉供父母。大藏經言、仏告阿難。昔有国王生一太子。(以下略)

この題記の中で「大藏經言」とあるのは『仏報恩經』卷一「孝養品」の須闍提太子の説話より取意引用したものである。

以下、題記の刻經文と『仏報恩經』卷一の經文とを比較してみよう。

刻經文

大藏經言。仏告阿難。昔有国王生一太子。字曰闍提。身黄金色。

時羅睺。惡逐王驚抱太子。出投隣国。粮尽猶遠。

飢渴所迫。

難。佛言。鸚鵡樂多菓種。田者亦然。爾時鸚鵡。我身是也。爾時田主。舍利弗是。爾時盲父。淨飯王是。爾時盲母。摩耶是也。

(大正四・四四九上)

仏報恩經

爾時其王生一太子。字須闍提。聰明慈仁好喜布施。須闍提太子者。身黄金色七處平滿。人相具足。(大正三・一二八中)

羅睺大臣近生惡逆。殺父王竟伺捕二兄。亦斷命根。今者兵馬次來収我。今欲逃命。即便抱須闍提太子。即出進路。

爾時夫人亦隨後從去。時王荒錯心意迷亂。誤入十四日道。其道險難無有水草。前行數日糧餉已盡。本意盛一人分糧。行七
日道。今者三人共食。誤入十四日道數日。糧食已盡。前路猶
遠。是時大王及與夫人舉聲大哭。怪哉怪哉。苦哉苦哉。從生
已來。常未曾聞有如是苦。如何今日身自更之。今日窮厄衰禍
已至。舉手拍頭塵土自空。舉身投地自悔責言。我等宿世造何
惡行。爲殺父母真人羅漢。爲謗正法壞和合僧。爲毆獵漁捕輕
秤小斗劫奪衆生。爲用招提僧物。如何今日受此禍對。正欲小
停懼怨家至。若爲怨得必死不疑。正欲前進飢渴所逼。命在呼
噓

(大正三・一二八下、二九上)

太子自言。就子身上。日割分作三分。奉上父母。
一分自食。父母聽之。割而食之。隨路而去。

須闍提言。父母今者爲愍子故。可日日持刀就子身上。割三
斤肉分作三分。二分奉上父母。一分還自食之以續身命
爾時父母即隨子言。割三斤肉分作三分。二分父母。一分自食
以支身命。得至前路。二日未至身肉轉盡。身體肢節骨髓相連。
餘命未斷尋便倒地。爾時父母尋前抱持舉聲大哭。復發聲言我
等無狀。橫噉汝肉使汝苦痛。前路猶遠未達所在。而汝肉已盡。
今者併命聚屍一處。
爾時須闍提微聲諫言。已噉子肉進路至此。計前里程餘有一日。
子身今者不能移動。捨命於此。父母今者。莫如凡人併命一處。
仰白一言。爲憐愍故莫見拒逆。可於身諸節間淨刮餘肉。用濟

太子復言。假使熱鉄輪。于我頂上旋。終不以此苦。
退于無上道。若我欺誑。身瘡不合。若不爾者。平
復如故。即時身體端正倍常。

仏告阿難。彼父母者。今父母是。爾時太子。即我
身是。〔大足石刻研究〕二七一頁)

以上を比較すると、大方便仏報恩經變図の刻経文は『仏報恩經』から取意し引用したことは明らかである。
肉を切り取り父母を救った須闍提の話は、敦煌莫高窟の第二九六窟の北壁にあるが、この壁画では、須闍提太
子が自分の体の肉を父母に与える場面も描かれている。この説話は『賢愚經』^九卷一などにもみられる。

(二) 釈迦因地修行捨身濟虎図

この図像の中には長い卓が置かれ、卓の上には薩埵太子の骸骨が置かれ、父王がその頭を撫で、母后はその
足を撫でて悲泣している。図像の上部に飛天が、左には虎が牙をむいている。題記の刻経文はつぎの如くで

大足宝頂山石刻の思想史的考察(鎌田)

父母可達所在。爾時父母即隨其言。於身肢節更取少肉。分作
三分。一分與兒。二分自食。食已父母別去。須闍提起立住視
父母。父母爾時舉聲大哭。隨路而去。

(大正三・一二九中)

須闍提報天王釋言。假使熱鐵輪在我頂上旋。終不以此苦退於
無上道。天王釋言。汝惟空言誰當信汝。須闍提即立誓願。若
我欺誑天王釋者。令我身瘡始終莫合。若不爾者。令我身體平
復如故。血當反白爲乳。即時身體平復如故。血即反白爲乳。
身體形容端正倍常。

(大正三・一二九下)

佛告阿難。爾時父王者今現我父輸頭檀是。爾時母者今現我
母摩耶夫人是。爾時須闍提太子者今則我身釋迦如來是。

(大正三・一三〇上)

ある。

大藏経言。薩埵太子捨身濟虎。父母聞已。奔至捨身之處。時虎食肉已。惟有骸骨。狼籍在地。父母扶其頭足。哀号悶絶。太子命終。生兜率天。天眼見前父母悲悼啼哭過甚。或喪身命。我当往諫。即從天下。住于空中。種種言詞。解諫父母。父母仰問。是何神耶。天曰。我是太子摩訶薩埵。我由濟虎。生兜率天。父母当知。有法歸無。生必有終。何不自覺。父母言。汝行大慈。恩及一切。于是天人復以偈句報謝父母。令得醒悟。皆是如来神智通達。不可思議。時薩埵太子。即我是也。

この刻経文と、聖勇菩薩等造、宋朝散大夫試鴻臚少卿同訳経、梵才大師紹徳慧詢等奉詔訳の『菩薩本生鬘論』卷一の「投身飼虎縁起」第一(大正三・三三二中〜三四中)の経文とを対照してみたが、明確に対応できる部分はほとんどないので、取意して簡略化したものと思われる。

また北涼の法盛訳の『菩薩投身飴餓虎起塔因縁経』の経文とも対応する部分はほとんどないので、その内容を簡略化して書いたのが刻経文であると思われる。

この有名な説話は敦煌莫高窟第二五四窟(北魏)の南壁にも壁画として描かれている。それは飢えに苦しむ虎の親子に自分の体を与えようと、断崖から飛びおりた薩埵太子を虎の親子がむらがり食べている有名な絵である。

東壁の下層には「六師外道謗仏不孝図」のみがある。この図像の中には乞食姿の阿難が立っており、つぎに天秤捧で老父母をのせた竹籠をかついでいる百姓姿の孝子がいる。その左側には六師外道が彫造されているが、六師の中の尼捷親子がないので、五師の像である。この六師外道の図像の上に半身の女人像、梅遮摩耶が短笛を吹いている。

この題記の刻経文と大正蔵経本『仏報恩経』卷一の序品の経文とを対照するとつぎの如くなる。

題記

大藏仏説大方便仏報恩經。

如是我聞。一時仏在耆闍崛山中。大衆圍遶。

仏報恩經序品

如是我聞。一時佛住王舍城耆闍崛山中。與大比丘衆二萬八千人俱。

爾時如來大衆圍遶。

時阿難入城乞食。城中有一男子。孝養父母。家□蕩

盡。担父母行乞。好者奉親。惡者自食。阿難偈讚男子

供養父母。□時難及。有六師徒。執着邪論。殘滅正法。

心懷嫉妬。

爾時阿難承佛威神。於晨朝時入王舍城次第乞食。爾時城中有一婆羅門子。孝養父母。

其家衰喪家計蕩盡。擔負老母。亦次第行乞。若得好食香美菓蔬。仰奉於母。若得惡食萎菜乾果。而自食之。阿難見之心

生歡喜。偈讚此人。善哉善哉。善男子。供養父母奇特難及。

有一梵志。是六師徒黨。其人聰辯。悉能通達四圍陀典。曆數

算計。占相吉凶。陰陽改變。豫知人心。亦是大衆唱導之師。

多人瞻奉。執著邪論。爲利養故。殘滅正法。心懷嫉妬毀佛法衆。

(大正三·一二四上—中)

語阿難曰。汝師積種。自言善好。有大功德。唯有空

名。而無實行。捨父母出城。不知恩分。是不孝人。阿

語阿難言。汝師瞿曇。諸釋種子。自言善好有大功德。唯有空名而無實行。汝師瞿曇實是惡人。適生一七。其母命終。豈非

難聞已。心懷慙愧。詣仏白言。仏法中頗有孝養父母不。仏言。誰教汝向。阿難言。乞食逢六師徒。見毀罵辱。如上所陳。世尊微笑。放五色光。至十方如來所。

惡人也。逾出宮城。父王苦惱生狂癡心。迷悶躡地。以水灑面。七日方能醒悟。云何今日失我所生。舉聲大哭悲淚而言。國是汝有。吾唯有汝一子。云何捨我入於深山。汝師瞿曇。不知恩分而不顧緣。遂前而去。是故當知是不孝人。父王爲立宮殿。納娶瞿夷。而不行婦人之禮。令其愁毒。是故當知無恩分人。阿難聞是語已。心生慙愧。乞食已還詣佛所。頭面禮足却住一面。合掌白佛言。世尊。佛法之中。頗有孝養父母不耶。佛語阿難。誰教汝令發是問。諸天神耶。人耶非人耶。汝爲自以智力問於如來耶。阿難言。亦無諸天龍鬼神人及非人來見教也。向者乞食。道逢六師徒黨遮尼乾。見毀罵辱。阿難卽以上事向如來說。爾時世尊熙怡微笑。從其面門放五色光。過於東方無量百千萬億佛土。

(大正三・一二四下)

彼國菩薩同音。何緣有此光明。彼國仏言。有娑婆界仏号釈迦。爲大衆說大方便仏報恩經。欲令衆生孝養父母。故放斯光明。

彼國菩薩無量億千。前後圍遶却住一面。合掌向於如來。異口同音俱發聲言。惟願世尊。哀慈憐愍。以何因緣有此光明。青黃赤白其色輝艷難可得喻。從西方來照此大衆。其有遇斯光者。心意泰然。惟願世尊。斷我疑網。佛言。諸善男子。諦聽諦聽善思念之。吾當爲汝分別解說。西方去此無量百千諸佛世界。有世界名娑婆。其中有佛。號曰釋迦牟尼如來應供正遍知。明行足善逝世間解無上士調御丈夫天人師佛世尊。大衆圍遶。今欲爲諸大衆說大方便大報恩經。爲欲饒益一切諸衆生故。爲

爾時如來身中現五趣身。一一身中現無量微塵數
不思議形相。一切衆生具足受身。以受身故。一切
衆生曾為如來父母。如來亦曾為衆生作父母。故常
修難行苦行。難捨能捨。勤修精進。具足万行。不
休不息。心無疲倦。為孝養父母故。令得速成無上
菩薩。由孝德也。

欲拔出一切衆生邪疑毒箭故。為欲令初發意菩薩堅固菩提不退
轉故。為令一切聲聞辟支佛究竟一乘道故。為諸大菩薩速成菩
提報佛恩故。欲令一切衆生念重恩故。欲令衆生越於苦海故。
欲令衆生孝養父母故。以是因緣故。放斯光明。

(大正三·一二五上)

佛報恩經孝養品第二

爾時大衆之中。有七寶蓮華。從地化生。白銀為莖黃金為葉。
甄叔迦寶以為其臺。眞珠羅網次第莊嚴。爾時釋迦如來。即從
座起昇花臺上。結加趺坐即現淨身。於其身中現五趣身。一一
趣身有萬八千種形類。一一形類現百千種身。一一身中復有無
量恒河沙等身。於四恒河沙等一一身中。復現四天下大地微塵
等身。於一微塵身中。復現三千大千世界微塵等身。於一塵身
中。復現於十方一方面各百千億諸佛世界微塵等數身。乃至
虛空法界不思議衆生等身爾時如來現如是等身已告阿難言。及
十方諸來大菩薩摩訶薩。及一切大衆諸善男子等。如來今者以
正遍知。宣說眞實之言。法無言說。如來以妙方便。能以無名
相法作名相說。如來本於生死中時。於如是等微塵數不思議形
類一切衆生中。具足受身。以受身故。一切衆生亦會為如來父
母。如來亦會為一切衆生而作父母。為一切父母故。常修難行
苦行。難捨能捨。頭目髓腦國城妻子。象馬七珍輦輿車乘。衣
服飲食臥具醫藥。一切給與。勤修精進戒施多聞禪定智慧。乃

以上の対照表によってわかるように、この題記の文は『仏報恩経』卷一の序品と孝養品の引用であることがわかる。

つぎの西壁上層には三種の図像がある。

(一) 釈迦因地為睺子行孝図

図像には睺子(釈迦)が山中で毒箭で射られて家に帰る。床の上に仰臥している睺子の遺体を父母がなでている。図像の上部には阿難が立ち、手に物を捧げている。この図像の題記の刻経文と西晋沙門聖堅訳の『仏説睺子経』の経文を対照してみよう。

刻経文

釈迦仏因地為睺子行孝。

大蔵仏説睺子経云。仏告阿難。昔有菩薩。名曰慈慧。孝養父母師長。時迦夷國中有一長者。孤無兒子。兩目皆盲。心願入山。求無上慧。菩薩念言。此人入山学道。若我壽終。當為作子。菩薩命終。即便往生育父母家。字曰。睺子。睺年十歲。随父母入山採菓汲水。

至具足一切萬行。不休不息心無疲倦。為孝養父母知恩報恩故。今得速成阿耨多羅三藐三菩提。

(大正三・一二七中下)

仏説睺子経

佛告阿難。乃往過去無央數世。時有一菩薩名曰慈慧。救濟群生常行四等心。度世危厄愍育苦人。於是處在兜率天上教授天人。常以晝夜各三時三昧定意。思惟三界。照觀十方天下人民善惡之道。孝養父母敬奉三尊。供侍師長修諸功德。皆悉明見五道分明。時迦夷國中有一長者。孤無兒子夫妻兩目皆盲。心願入山求無上慧。修清淨志信樂虛閑。菩薩念言。此人發意欲學妙道。而兩目盲無所視見。若入山者或墮溝坑。或逢毒虫所見危害。若我壽終當為作子。供養父母終其年壽。即便往生

時國王出獵。箭誤中睽胸。被毒命終。

王心怖懼。詣子父母所。具言上事。父母令王牽我二人至于子所。捫摸睽箭。仰天呼言。睽子至孝。天地所知。箭當拔出。作是言已。感帝釈□藥更生如故。父母聞已。兩目皆開。王大歡喜。睽語王言。欲具福者。安慰人民。當令奉成。仏告阿難。彼睽子者。我身是也。

大足宝頂山石刻の思想史的考察(鎌田)

盲父母家。爲其作子。父母歡喜愛之甚重。本發道意欲行入山。以生子故便樂世間。子年七歲號字曰睽。睽至孝仁慈奉行十善不殺不盜不淫不欺誑不飲酒不妄語不嫉妬。信道不疑晝夜精進。奉侍父母如人侍天。言常含笑不傷人意。行則應法不妄傾邪。於是父母卽大歡悅。無復憂愁。睽年過十歲睽自長跪白父母言。本發大意欲入深山。求志虛寂無上之道。豈以子故而絕本願。人居世間無常百變。命非金石對至無期。願如本意宜本先志。自隨父母俱共入山侍養之宜不失時節。

(大正三・四三八中下)

時有迦夷國王入山射獵。王見水邊有諸群鹿。放弓射之。箭誤中睽正射其胷。被毒箭已舉身皆痛。

(大正三・四三八下)

大王。今者牽我二人往子尸上。王卽牽盲父母往到尸上。父抱其頭。母抱兩脚著其膝上。各以兩手捫摸睽箭。仰天呼言。諸天龍神山神樹神。我子睽者天下至孝。是諸天龍鬼神所知。我年已老目無所見。身代子死睽活不恨。於是父母俱共誓言。若睽至孝天地所知。箭當拔出毒痛當除睽應更生。於是第二忉利天帝座卽爲動。以眼見此二盲道人抱子號呼。乃聞第四兜率天上。釋梵四王從天上來。如人屈伸之頃。來往睽前。以神妙藥灌睽口中。藥入睽口箭拔出更生如故。父母聞睽

以死更生。兩目皆開。飛鳥走獸皆大歡樂之音。風息雲消日爲重光。流泉涌出清而且涼。池中蓮華五色清明。栴檀雜香樹木光榮香倍於常。時王歡喜不能自勝。禮天帝釋。還禮父母及子睽者。願以一國所有財寶。俱上道人自相供養。令我罪滅永無有餘。

睽語王言。欲興福者。王但還國安慰人民。當令奉戒王勿射獵橫殺無辜。(中略)

佛告阿難。諸來會者。宿命睽者吾身是耶。盲父者闍頭檀王是。盲母者今王夫人摩耶是也。迦夷國王者阿難是。天帝釋者彌勒佛是。

(大正三・四三九下〜四〇上)

深山で修行する盲目の父母を世話する睽子は、鹿皮をかぶって水をくみにいった。狩にきていた国王に鹿と間違われ、射殺されてしまう。かけつけた老父母の悲しむ姿を見て天の神は睽子を生き返らせ、父母の目も見えるようにした。ちなみにこの有名な説話は莫高窟第二九九窟に壁画として描かれている。

なお、この釈迦因地為睽子行孝図には、つぎのような三種の「仏牙讚文」が刻されている。

(一) 仏牙讚文曰。

太宗至仁応道神功聖徳文武睿烈大明広孝皇帝頌。

功成積劫印文端。不是南山得恐難。眼睹数重金色潤。手擎一片玉光寒。煉明百火精神透。藏処千年瑩光完。定果熏修真秘密。正心莫作等閑看。

(二) 真宗膺符稽古成功讓徳文明武定章聖元孝皇帝偈。

西方有聖号伽文。接物垂慈世所尊。常願進修增妙果。庶期饒益在黎元。

(三) 仁宗体天法道極功全德神文聖武浚哲明孝皇帝讚。

三皇掩質皆歸土。五帝潛形已化塵。夫子域中誇是聖。老君世上亦言真。埋軀只見空遺塚。何処將身示后人。惟有吾師金骨在。曾經百煉色長新。□□旧刻在廬山西林乾明寺。

〔大足石刻研究〕二七四—五頁

この三種の仏牙讚文の中の第三の仁宗体天法道極功全德神文聖武浚哲明孝皇帝讚の刻文は、もとは廬山の西林乾明寺に刻されていたものという。

この仏牙讚文は英宗が治平二年（一〇六五）、大相国寺に勅して三朝御製の仏牙讚碑を造つた時の讚文である。『仏祖統紀』^(一〇)卷四十五によると翰林学士臣王珪が撰文し、左僕射魏国公臣賈昌朝が書し、右僕射兼訳経潤文使衛国公臣韓琦が碑石を建てたという。ちなみに太宗、真宗、仁宗の仏牙讚文が『仏祖統紀』卷四十五に収録されているので、その讚文と宝頂山石刻の讚文とを比較すると多少、文字に異同があることがわかる。

(二) 釈迦因地剝肉図

図像の中では転輪聖王（釈迦）が上半身を出して合掌し跪いている。施陀羅が刀で釈迦の臂の肉を削いでおり、その前では、四川密教の創始者、趙智鳳が説法している。

この刻経文と『仏報恩経』卷二の対治品第三の経文とを対照してみよう。

刻経文

仏報恩経対治品

大蔵仏言。爾時轉輪聖王為求仏法。故遍処宣令。誰解仏法。皆云言無。有婆羅門解知仏法。時王出

爾時轉輪聖王。為求佛法故。於閻浮提遍處宣令。誰解佛法。大轉輪王欲得翫習。處處宣令。皆云言無。到一邊小國中。有

迎。請入正殿。敷坐御座。前諸大德。願坐此座。爾時大王見師。見已合掌自言。大師解仏法耶。師言。吾解仏法。王言。為我解說。師言。王大愚也。吾學□法。久受勤苦。因乃得成。大王云何直欲得聞。

若能就王身上剝作千瘡、燃灯供養。吾為汝說。不爾。吾去耳。大王即自思惟。報大師言。所需供養。當迅及時。王入言報諸夫人。吾有太子。今共汝別。

一婆羅門解知佛法。爾時使者逕往詣彼。至婆羅門所。問言。大德解佛法耶。答言解也。

爾時使者頭面禮足。報言。大師。大轉輪王欲相顧命。惟願大師。屈神德往至彼轉輪王所。時轉輪王遠出奉迎。頭面禮足問訊起居。冒涉塗路得無疲倦耶。即請入宮。於正殿上敷王御座。前請大師願坐此座。時婆羅門即昇妙座結跏趺坐。

爾時大王見於大師端坐已定。供給所須施安已竟。合掌向於婆羅門白言。大師。解佛法耶。時婆羅門報言。吾解佛法。爾時大王報言。大師。為我解說。婆羅門言。王大愚也。吾學是佛法。久受勤苦因乃得成。今者大王。云何直欲得聞。

(大正三・一三三中)

爾時大王白大師言。欲須何物。婆羅門言。與我供養。王言。所須供養爲是何物。衣被飲食耶。金銀珍寶耶。婆羅門言。吾不須如是供養。王言。若不須如是供養者。象馬車乘耶。國城妻子耶。音樂倡伎耶。婆羅門言。吾都不用如是供養也。若能就王身上。剝作千瘡。灌滿膏油。安施燈炷。燃以供養者。吾當爲汝解說佛法。若不能者吾欲起去。王未答頃尋下高座。爾時大王即前抱持報言。大師。小復留懷。今我智慧微淺功德

薄少。小頃自思惟當奉供養。

爾時轉輪聖王。卽自思惟而作是念。我從無始世界已來。喪身無數未曾爲法。今我此身當歸壞敗。都無所爲。今日正是其時。仰報大師言。所須供養者。當速辦之。

爾時大王卽入宮中報諸夫人。而我今者共汝等別。

(大正三・一三三下)

如我今者遠請大師。許相供養不得違錯。夫爲孝子不違父意。汝今云何違逆我心。時諸太子聞是語已。舉聲吼喚驚動神祇。舉身投地如太山崩。爾時大王復與諸小國王一切辭別。還至殿上往大師所。脫身瓔珞上妙衣服。舉著一面端身正坐。告諸大臣諸小國王。五百太子二萬夫人。汝等今者。誰能爲吾剗身千瘡。

(大正三・一三四上)

時有旃陀羅前語王言。欲剗身者。我能爲之。王聞歡喜。汝今真是我無上道伴。時旃陀羅持刀剗已。馳走而去。爾時大王于生瘡灌油。取油氈爲炷。爾時大師見是事已。告大王言。精進如是。難爲能爲。修此苦行。今當爲王宣說半偈云。夫生輒死。此滅爲樂。王聞法已。告諸人民。憶持是法。

苦痛如是。大王今者能堪是不。王聞是語心懷歡喜。時旃陀羅持牛舌刀就王身上。於胸速頃。遍體剜作數滿千瘡。時旃陀羅謂王意退而反不移。投刀於地馳走而去。

爾時大王於身諸瘡灌滿膏油已。取上妙細氈纏以爲炷。爾時婆羅門大師。見於大王作是事已。作是念言。我今應當先爲大王宣說佛法。何以故。大王今當燃身諸燈恐命不濟。命若不濟誰當聽法。思惟是已。告大王言。精進如是難爲能爲。修此苦行爲聞佛法。諦聽諦聽善思念之。吾當爲王宣說佛法。王聞是語心大歡喜。譬如孝子新喪父母。其子愁毒苦不可言。父母還活其子歡喜。王聞是語亦復如是。時婆羅門即便爲王而說半偈。謂興衰法。

夫生輒死

此滅爲樂

王聞法已心生歡喜。告諸太子及諸大臣。而作是言。諸人若於我有慈愍心者。應爲我憶持是法。

(大正三・一三四中下)

其見聞者。皆發阿耨多羅三藐三菩提心

爾時大王即燃千燈供養大師。其明遠照十方世界。其燈光中亦出音聲說此半偈。其聞法者皆發阿耨多羅三藐三菩提心。其光上照乃至忉利天宮。其燈光明悉能蔽隱諸天光明。時忉利天王。見此光明遠照天宮。卽作是念。以何因緣有此光明。卽以天眼觀於世間。見是大轉輪王以大慈悲熏修其心。爲一切衆生故。剎身千燈供養大師。爲度一切衆生故。是故我等今當往於世間。勸戒佐助令心歡喜。卽下世間化作凡人。往詣王所問大王言。

其見聞者。速發無上菩提心。爾時大王燃燈供養、

其明遠照。一切衆會。皆發道心。歡喜而去。是故

轉輪聖王。卽是如來。

(三) 釈迦因地雁書報太子図

凶像の中では善友太子が地に跪き、両手で盤中の宝珠を捧げて發願式を行っている。右の前方に男女の坐像があるが、それは善友太子の両親である。上方に大きな雁が空中を飛んでいるが、頸には書信をかけている。この凶像の刻經文と『仏報恩經』の經文を対照するとつぎの如くである。

刻經文

大藏佛說大方便報恩經釈迦雁書報太子。

大藏仏言。善友太子入海採宝。留滯他国。未入海時。養一白雁。時母夫人向白雁言。太子昔時常汝俱。今入大海。生死未分。汝今云何不念太子。雁即報言。欲覓太子。不敢違命。時夫人作書繫在雁頭。其雁飛空。至于大海。遙見太子。歛身而下。太子取書。發封披讀。即知父母追念太子。兩目失明。尋即帰国。父母歡喜。

剷身千燈修此苦行。爲求半偈何所作爲。報言。善男子。我爲一切衆生故。令發阿耨多羅三藐三菩提心。

爾時化人即復釋身。

(大正三・一三四下)

仏報恩經惡友品

爾時善友太子。未入大海在宮殿時。養一白雁。衣被飲食行住坐臥。而常共俱。爾時夫人往到其所。報其鴈言。太子在時常共汝俱。今入大海未還。生死未分。而我不能得知定實。汝今云何不感念太子。鴈聞是語。悲鳴宛轉啼淚滿目。報言。大王夫人。欲使求覓太子者。不敢違命。爾時夫人。手自作書繫其鴈頸。其鴈音響問太子大海所在。身昇虛空飛翔宛轉而去。夫人見已心生恃頼。今者此鴈。其必定得我子死活定實消息。飛至大海。經過周遍求覓不見。次第往到利師跋國。遙見善友太子在宮殿前。其鴈歛身擁翅往趣。到已悲鳴歡喜。太子即取母書。頭頂禮敬發封披讀。即知父母晝夜悲哭追念太子兩目失明。

王与夫人。目瞑不見太子形容。以手捫摸。作如是言。父母念汝。憂苦如是。太子問訊起居事訖。

持珠發願。此是如意宝者。令父母兩目明淨如故。作是願已。尋即平復。父母見子。歡喜無量。時善友太子者亦□如來。

西壁中層にも二種の凶像が刻されている。

(一) 釈迦因地修行捨身求法図

雪山童子(釈迦)が山から下りてきて山腹に腰掛け両手は合掌している。山の下では羅刹が跪いて手を童子に触れようとしている。雪山童子は羅刹に説教している。

爾時太子即作手書。具以上事向父母說。復以書繫其鴈頸。其鴈歡喜還波羅奈。父母得太子書。歡喜踊躍稱善無量。
(大正三・一四六中下)

善友太子前爲父母頭面禮足。王與夫人目瞑不見太子形容。以手捫摸。汝是我子善友非耶。父母念汝憂苦如是。太子問訊父母起居訖竟。
(大正三・一四六下)

汝持我寶珠今在何處。如是至三。而方報言。在彼土中。善友太子還得寶珠。往父母前跪燒妙香。即呪誓言。此寶珠是如意宝者。令我父母兩目明淨如故。作是願已尋時平復。父母得見其子。歡喜踊躍慶幸無量……

(中略)

爾時善友太子者。今我身是。

(大正三・一四六下—四七上)

この刻經文と北涼天竺三藏曇無讖訳の『大般涅槃經』卷十四の聖行品第七之四と対照してみよう。

刻經文

釈迦仏因地修行。捨身求法。

大藏仏言。過去世尊修菩薩行。能通達一切外道經論。修寂滅行。不為外道破壞受持。常樂我淨。求學大乘。雪山坐禪。經無量歲。亦不聞如來出世。大乘經名。我修如是苦行時。帝釈諸天。心生驚怖。集會説偈。

大般涅槃經聖行品

善男子。過去之世佛日未出。我於爾時作婆羅門修菩薩行。悉能通達一切外道所有經論。修寂滅行具足威儀其心清淨。不為外來能生欲想之所破壞。滅瞋恚火受持常樂我淨之法。周遍求索大乘經典乃至不聞方等名字。我於爾時住於雪山。其山清淨流泉浴池樹林藥木充滿其地。處處石間有清流水。多諸香花周遍嚴飾。衆鳥禽獸不可稱計。甘果滋繁種別難計。復有無量藕根甘根青木香根。我於爾時獨處其中唯食諸果。食已繫心思惟坐禪經無量歲。亦不聞有如來出世大乘經名善男子。我修如是難行苦行時。釋提桓因等諸天人心大驚怪。即共集會各各相謂。而説偈言。

(大正十二・四四九中)

雪山大士。惟求菩提。世人當來世中。作善逝者。除滅力量。熾然煩惱。實為難信。

如是大士清淨無染衆結永盡。唯欲求於阿耨多羅三藐三菩提。釋提桓因復作是言。如汝言者。是人則為攝取一切世間所有衆生大仙。若此世間有佛樹者。能除一切諸天世人及阿修羅煩惱毒蛇。若諸衆生住是佛樹陰涼中者。煩惱諸毒悉得消滅。大仙。是人若當未來世中作善逝者。我等悉當得滅無量熾然煩惱。如是之事實為難信。

我今試之。堪任菩提。重担不。

即現羅刹形。下至雪山。說半偈云。諸行無常。是生滅法。我聞半偈。心生歡喜。誰能說是半偈。啓悟我心。如是半偈。

□□□□是過去未來現在諸仏之正道也。羅刹答言。問我是義。我不食多日。飢惱心乱。非我本心所為。求食不得。故說是語。

(大正十二・四四九下)

我今要當自往試之。知其實能堪任荷負阿耨多羅三藐三菩提大重擔不。

(大正十二・四五〇上)

爾時釋提桓因。自變其身作羅刹像形甚可畏。下至雪山去其不遠而便立住。是時羅刹。心無所畏勇健難當。辯才次第其聲清雅。宣過去佛所說半偈。

諸行無常 是生滅法

說是半偈已便住其前。所現形貌甚可怖畏。顧眄遍視觀於四方。是苦行者。聞是半偈心生歡喜。

(大正十二・四五〇上)

是諸衆生常爲煩惱重病所纏。誰能於中爲作良醫。說是半偈啓悟我心。

(大正十二・四五〇中)

大士。是半偈義乃是過去未來現在諸佛世尊之正道也。一切世間無量衆生常爲諸見羅網所覆。終身於此外道法中。初不會聞如是出世十力世雄所說空義。善男子。我問是已。即答我言。大婆羅門。汝今不應問我是義。何以故。我不食來已經多日。

處處求索了不能得。飢渴苦惱心亂調語。非我本心之所知也。假使我今力能飛行虛空至鬱單越。乃至天上處處求食亦不能得。以是之故我說是語。善男子。我時即復語羅刹言。大士。若能爲我說是偈竟。

(大正十二·四五〇中)

我問羅刹。所食何物。答言。我食人暖肉熱血。但爲我說偈竟。我當以此身供養。我設命終。此身無用。我爲菩提捨不堅身。得金剛身。

我即問言。汝所食者。爲是何物。羅刹答言。汝不足問。我若說者令多人怖。我復問言。此中獨處更無有人。我不畏汝何故不說。羅刹答言。我所食者唯人暖肉。其所飲者唯人熱血。自我薄福唯食此食。周遍求索困不能得。世雖多人皆有福德。兼爲諸天之所守護。而我無力不能得殺。善男子。我復語言。汝但具足說是半偈。我聞偈已當以此身奉施供養。大士。我設命終。如此之身無所復用。當爲虎狼鷄梟鷓鷯之所噉食。然復不得一毫之福。我今爲求阿耨多羅三藐三菩提。捨不堅身以易堅身。羅刹答言。誰當信汝如是之言。爲八字放棄所愛身。善男子。我即答言。汝真無智。譬如有人施他凡器得七寶器。我亦如是。捨不堅身得金剛身。

(大正十二·四五〇下)

願爲我說。今得具足。羅刹即說。生滅滅已。寂滅爲樂。我若□□□壁道□□□上高樹捨生。以報偈讚。

誰願和上。善爲我說其餘半偈令得具足羅刹即說
生滅滅已 寂滅爲樂
爾時羅刹說是偈已復作是言。菩薩摩訶薩汝今已聞具足偈義。

汝之所願爲悉滿足。若必欲利諸衆生者。時施我身。善男子。我於爾時深思此義。然後處處若石若壁若樹若道書寫此偈。即便更繫所著衣裳。恐其死後身體露現。卽上高樹。

(大正十二・四五〇下―五一上)

未至地時。羅刹復帝釈。接取菩薩。釈梵諸天。稽首贊曰。真是菩薩。利益衆生。無明暗中。燃大火炬。我愛如來大法。故相燒惱。□願聽懺悔。汝必定成阿耨菩提。願見濟度。時帝釈諸天。繞菩薩足。頂礼而去。

(二) 釈迦詣父王所診病図

この図像の中には釈迦の父、浄飯王が床に病臥し、釈迦が床の側に立ち、右手を父の額にあて、左手は父の手を握って病状を診ている。釈迦の後には一人の比丘が合掌して立ち、左の一人が浄飯王の足を捧げている。この図像の刻経文と劉宋居士沮渠京声訳の『仏説浄飯王般涅槃經』の経文とをつぎに対照してみよう。

刻経文

釈迦牟尼仏詣父王所看病。

亦令得見我爲一偈捨此身命如棄草木。我於爾時說是語已。尋卽放身自投樹下。下未至地時。虛空之中出種種聲。其聲乃至阿迦尼吒。爾時羅刹還復釋身。卽於空中接取我身安置平地。爾時釋提桓因及諸天人大梵天王。稽首頂禮於我足下。讚言。善哉善哉。真是菩薩。能大利益無量衆生。欲於無明黑闇之中燃大火炬。由我愛惜如來大法故相燒惱。唯願聽我懺悔罪咎。汝於未來必定成就阿耨多羅三藐三菩提願見濟度。爾時釋提桓因及諸天衆。頂禮我足。於是辭去忽然不現。

(大正十二・四五一上)

仏説浄飯王般涅槃經

如是我聞。一時佛住王舍城耆闍崛山中。與大比丘衆俱。爾時

仏在王舎城耆闍崛山中。光明如日。時淨飯王四大俱被殘害。其体喘息不定。種種医治。無法能愈者。告諸王曰。我今雖逝。不以為苦。但恨不見我子悉達。

如来已知父王欲終。要見諸子。告難陀曰。淨飯王者是我曹父。能生聖子。利益世間。今宜往詣。報育養恩。

世尊放大光明。光照王身。患者得安。王言。是何

大足宝頂山石刻の思想史の考察(鎌田)

世尊。光明輝耀。喻若日出照明世間。時舍夷國王。名曰淨飯。治以正法。禮德仁義。常行慈心。時被重病。身中四大。同時俱作。殘害其體。支節欲解。喘息不定。如駛水流。輔相宣令國中明醫。皆悉集會。瞻王所疾。隨病授藥。種種療治。無能愈者。瑞應已至。將死不久。時王煩躁。轉側不停。如少水魚夫人採女。見其如是。益更愁惱。時白飯王。斛飯王。大稱王等。及諸群臣。同發聲言。今王設崩。永失覆護。國將虛弱。王身戰動。脣口乾燥。語聲數絕。眩目淚下。時諸王等。皆以敬意。長跪叉手。同共白言。大王素性。不好作惡。經彈指頃。積德無厭。護養人民。莫不得安。名聞十方。大王今日。何故愁惱。時淨飯王。語聲輒出。告諸王曰。我命雖逝。不以為苦。但恨不見我子悉達。

(大正十四・七八一上中)

即以天眼。遙見父王。病臥著床羸困憔悴命欲向終。知父渴仰欲見諸子。爾時世尊告難陀曰。父王淨飯。勝世間王。是我曹父。今得重病。宜當往見。餘命少在。時嚴速發。我曹應往。及命存在。得與相見。令王願滿。難陀受教。長跪作禮。唯然世尊。淨飯王者。是我曹父。所作奇特。能生聖子。利益世間。今宜往詣。報育養恩。

(大正十四・七八一下)

於是世尊。即以十力四無所畏十八不共諸佛之法。放大光明。

光也。脱是我子悉達來也。王見仏來。惟願手觸我身。令我得安。我今得見世尊。痛恨即除。

更復重以三十二相八十種好。放大光明。以從無量阿僧祇劫。所作功德。放大光明。其光照曜。内外通達。周遍國界。光照王身。患苦得安。王遂怪言。是何光耶。爲日月光諸天光乎。光觸我身。如天梅檀。令我身中患苦得息。我遂疑怪儻是我子。悉達來也。先現光明。是其瑞耳。時大稱王。從外入宮。白大王言。世尊已來。將諸弟子。阿難難陀羅云之等。乘空來至。王宜歡喜。捨愁毒心。王聞佛來。敬意踊躍。不覺起坐。須臾之頃。佛便入宮。王見佛到。遙舉兩手。接足而言。唯願如來。手觸我身。令我得安。爲病所困。如壓麻油。痛不可忍。我命將逝。寧可還反。我今最後。得見世尊。痛恨即除。

(大正十四・七八二上)

仏即以手着父王額。王心歡喜。不宜煩惱。常諦思念諸經法義。

佛言。唯願父王。莫復愁悵。所以然者。道德純備。無有缺減。佛從袈裟裏出金色臂。掌如蓮華。即以手著父王額上。王是清淨。戒行之人。心垢已離。今應歡悅。不宜煩惱。當諦思念。諸經法義。

(大正十四・七八二中)

時王聞已。喜不自勝。即以手捉仏手。着手心上。王于臥処合掌作礼。命尽氣絶。

時淨飯王。聞是語已。歡喜踊躍。不能自勝。即以自手。捉於佛手。著其心上。王於臥處。仰向合掌。白世尊言。我瞻如來。眼眩不眴。視之無厭。我願已滿。心意踊躍。從是取別。如來至眞。多所饒益。其有得見。聞所說者。此輩之等皆是有相。大功德人。今日世尊。是我之子。接遇過多。不見捐棄。

王於臥處。合掌心禮世尊足下。時佛手掌。故在王心。無常對至。命盡氣絕。

(大正十四・七八二中)

仏告衆言。父王淨飯。捨此身已。生淨居天。衆會聞已。即捨愁毒。不可思議。

於時世尊。告衆會曰。父王淨飯。是清淨人。生淨居天。衆會聞是語已。便捨愁毒。佛說經竟。

(大正十四・七八三中)

この西壁の下層に一つの図像がある。それは「大孝釈迦仏親擔父王棺」という図像である。図像の中には六名の人物像があるが、それは難陀、釈迦、二人の天王、阿難、羅雲（釈迦の子）である。難陀は手に香爐を持って前の王棺を視ながら歩き、釈迦は肩に王棺を擔ぎ、頭から二本の頭光を發しており、その頭光の中には「大孝釈迦仏親擔父王棺」の一〇字が刻されている。二人の天王は向いあつて腰をかがめて王棺を擔いでいる。阿難と羅雲は合掌して哀悼の意を表わしている。難陀の前の上方に一つの塔があり、その塔には「淨飯大王舍利宝塔」という字が刻されている。

題記の刻經文と沮渠京声訳の『淨飯王般涅槃經』の經文を対照してみよう。

刻經文

淨飯王般涅槃經

釈迦牟尼仏。為來世衆生設化法。故擔父王棺。大藏仏言。父王終已。至闍維時。

仏共難陀等喪頭前肅恭而立。阿難、羅雲在喪足後。

佛共難陀。在喪頭前肅恭而立。阿難羅雲。住在喪足。難陀

阿難白佛言。唯願聽我擔父王棺。羅雲復言。唯願聽我擔祖王棺。世尊慰言。當來世人。皆狂暴不報父母養育之恩。為是不孝衆生設化法。故如來躬欲擔于父王之棺。即時世界六種震動。一時諸大鬼神。皆來赴喪。

四天王衆皆共舉喪。而白佛言。佛為當來不孝父母者故。以自身親擔父王棺。我等是佛弟子。從佛聞法。得須陀洹。是故我曹宜擔父王棺。即變為人。一切人民。莫不啼泣。世尊躬自手執香爐在前。行于墓所。令千羅漢。取種種香末。以火焚之。

長跪。白佛言。父王養我。願聽難陀擔父王棺。阿難合掌。前白佛言。唯願聽我擔伯父棺。羅雲復前而白佛言。唯願聽我擔祖王棺。爾時世尊。念當來世。人民兇暴。不報父母育養之恩。為是不孝之者。為是當來衆生之等。設禮法故。如來躬身。自欲擔於父王之棺。即時三千大千世界。六種震動。一切衆山。駃駃涌沒。如水上船。爾時欲界。一切諸天。與無央數百千眷屬。俱來赴喪。北方天王毘沙門。將諸夜叉鬼神之等。億百千衆。俱來赴喪。

(大正十四·七八二下)

時四天王。竊共思議。瞻望世尊。為當來世諸不孝順父母者故。以大慈悲。現自躬身擔父王棺。時四天王。俱共長跪。同時發聲。俱白佛言。唯然世尊。願聽我等擔父王棺。所以然者。我等亦是佛之弟子。亦復從佛。聞法意解。得法眼淨。成須陀洹。以是之故。我曹宜擔父王之棺。爾時世尊。聽四天王擔父王棺。時四天王。各自變身。如人形像。以手擊棺。擔在肩上。舉國人民。一切大衆。莫不啼哭。爾時世尊。威光益顯。如萬日並。如來躬身。手執香爐。在喪前行。出詣葬所。靈鷲山上。有千阿羅漢。以神足力。乘虛來至。稽首佛足。復白佛言。唯願世尊。勅使何事。時佛便告諸阿羅漢。汝等疾往大海渚上。取牛頭栴檀種種香木。即受教勅。如彈指頃。各到大海。共取香薪。屈伸臂頃。便已來到。佛與

爾時諸王。收骨置金剛函。便共起塔。而為供養。
大衆人民。作礼奉持。

(『大足石刻研究』二七二頁)

大衆。共積香薪。舉棺置上。放火焚之。
(大正十四・七八三上)

爾時諸王。各各皆持五百瓶乳。以用滅火。火滅之後。競共收骨。盛置金函。即於其上。便共起塔。懸繪幡蓋及種種鈴供養塔廟。時諸大衆。同時發聲。俱白佛言。大淨飯王。今已命終。神生何所。唯願世尊。分別解說。於時世尊。告衆會曰。父王淨飯。是清淨人。生淨居天。衆會聞是語已。便捨愁毒。佛說經竟。諸天龍神。及四天王。所將拳屬。世間人民。一切大衆為佛作禮各自還去

(大正十四・七八三上中)

以上の対照表によって明らかかなように宝頂山石刻の刻経文は『仏報恩経』の经文から巧みに要点を抜萃して意味が通じるようにしてあるものである。石刻の刻経者がこのような抜萃を行ったのではなく、すでに『報恩経』の講経文が存在していたことは明らかである。『父母恩重経講経文』と同じように『報恩経講経文』が存在していたのであり、恐らく『父母恩重経講経文』と同じ頃、推定すれば九世紀頃には存在していたのではないかと思う。

四 孝經典關係変相図彫刻の思想史的考察

大足宝頂山石刻の中に父母恩重経変図と大方便仏報恩経変図が彫刻された理由を考えてみたい。

大足宝頂山石刻の思想史的考察(鎌田)

『父母恩重經』と『方便仏報恩經』とが仏教における孝經典の代表であることは自明の理であるが、それが大足宝頂山に彫刻されたのは如何なる理由によるのか。

まず、宝頂山石刻を彫造した趙智鳳が何故、仏教の孝經典の変相図を彫刻したのかを考えてみたい。趙智鳳については胡昭曦氏の論文がある^(二)のでその研究によりながら簡単に述べておきたい。

趙智鳳の伝記は僧伝類には記述されていないが、大仏湾の南崖にある「重修宝頂山聖寿院記」という碑文の中に、その生涯の概略が述べられている。また民国『大足県志』卷五の僧道伝に聖寿院碑記を引用して趙智鳳の伝^(三)を収録している。

趙智鳳は一名智宗、世に趙本尊または阿闍黎と称した。宋の紹興二十九年(一一五九)七月十四日、米粮里沙溪で生まれた。米粮里は大足県の東三十里にあり、米粮関から五里離れた場所である。米粮里はまた弥陀郷とも呼ばれた。それは宝頂山の南約十華里のところであった。

五歳の時に古仏崖で落髮して僧となった。近くには大仏巖があつた。十六歳の時、西の弥牟に行き三年間雲游した。弥牟とは現在の新都県弥牟鎮である。この弥牟鎮は柳本尊が開教宣化した場所であり、そこには修行道場もあつた。その道場で趙智鳳もまた柳本尊の瑜伽仏教によって三年間修行したのである。

十九歳の時(一一七七)、三年雲游の後、古仏崖に帰り、小仏湾にまず聖寿本尊殿を修建した。その山を宝頂山と名づけた。宝頂山の山名はこれより始まるという。趙智鳳は宝頂山を拠点として大規模な布教活動を行った。多くの信奉者が集つたが、彼らこそ趙智鳳の石刻造像活動の支持者であり、資金の援助者でもあつた。小規模の聖寿本尊殿から大規模な大仏湾の石刻造像へと発展したのである。

趙智鳳が修建した聖寿寺は元兵の侵入によって破壊された。蒙古は金を滅ぼしてから四川地方に進攻した。宋

の理宗の端平三年（一二三六）九月、蒙古軍は成都を始め多くの州県を陥落させた。大足県のある昌州も陥落した。宝頂山石刻の修建も当然、この影響を受けた。最後に雕造された十大明王龕の造像は途中でやむを得ず中止されるに至った。

趙智鳳が宝頂山石刻を修建した時期は、宋の淳熙六年（一一七九）から淳祐九年（一二四九）の七十年間と推定されている。趙智鳳の没年は不明であるが、理宗の淳祐九年とすれば、趙智鳳は九十一歳で没したことになる。宝頂山石窟を拡大修建したのは趙智鳳であるが、彼が出家した古仏崖には、すでに寺廟と摩崖造像があったと思われる。古仏崖が宝頂山に属するとすれば、宝頂山は李正心氏の説^(三)のように、初唐に開創され、五代、北宋、南宋を歴た数百年の間に小規模な雕造は行われていたが、大規模な石刻造像と寺廟の建立は、南宋の趙智鳳によって修建されたとみるべきである。

李正心氏は宝頂山摩崖造像が唐から南宋に至る数百年にわたって造営された理由として五つの論拠をあげている。その五つの理由とは、（一）小仏湾の経目塔の経目の中には圀（国）など七字の武周新字が用いられていること、（二）大仏湾北崖の西端に彫刻された「福寿」という大文字の下に「陳希夷書」とあるが、陳希夷は五代、北宋の人であること、（三）現存している宝頂山の碑碣によると、その開創は魯班に始まり唐の大中九年（八五五）、柳本尊が重修、宋の嘉熙年間（一二三七―四〇）趙智鳳が修建したこと（史彰「重開宝頂碑記」）は明らかで、宝頂山には唐代の石仏千百尊があったともいう。（四）曹学全の『蜀中広記』によると、唐の柳本尊が大崖に浮屠像を彫刻し、また竜潭（宝頂山石窟の十三箇の子窟の一つで、大仏湾から約二キロ離れたところにある）に唐人の碑があるという。（五）宝頂山の地獄変図や仏報恩経変図は盛唐の呉道子の画風や敦煌の唐代の壁画とも関係があり、また大足北山、石門山、石篆山、妙高山などの造像にみられる儒仏道三教調和の造像が宝頂山に

はないという。この五つの論拠によって、宝頂山の造像は唐代から南宋にかけて雕刻されたという。もちろん柳本尊行化図や牧牛図などは宋代のものであることは明らかである。

宝頂山石刻を造像した趙智鳳の伝記は簡単なものであり、趙智鳳自身に仏教の孝思想が存在したかどうかは不明であるが、趙智鳳が学んだ柳本尊の教説の中に仏教の孝思想が存在していたのかも知れない。

宝頂山石刻の孝經典の雕刻の背景は、仏教の孝を説く經典、すなわち仏教の孝經典であるが、その概要については、道端良秀氏の研究^(一四)がある。道端氏は、『仏昇忉利天為母說法經』『六方礼經』『仏説父母恩難報經』『四十二章經』『仏説孝子經』『大無量寿經』『觀無量寿經』『仏説睽子經』『大方便仏報恩經』『大乘本生心地觀經』などに述べられた孝思想についてふれ、その他、唐の道世の『法苑珠林』巻四十九の忠孝篇・不孝篇、巻五十の報恩篇・背恩篇、また『諸經要集』巻八の報恩縁・背恩縁に引用されている孝經典や父母の恩經典をみると、『如末羅王經』『増一阿含經』『地獄經』『敬師經』『毘曇論』『六度集經』『四十二章經』『雜寶藏經』『智度論』『涅槃經』『未生怨經』『百緣經』『新婆沙論』『正法念經』『大般若經』『舍利弗問經』『中陰經』『父母恩難報經』『觀仏三昧經』『仏昇忉利天為母說法經』『六度集經』『百喻經』『九色鹿經』『雀王經』『仏説栴檀樹經』などが引用されているという。

これらの經典の中で大足宝頂山石刻に影響を与えた孝經典は『父母恩重經』と『仏報恩經』を主とし、その他『仏説睽子經』や『雜寶藏經』『大般涅槃經』『淨飯王般涅槃經』などである。

これらの經典の中で『父母恩重經』は講經文となり、変相図となり、さらに『十恩徳』とともに民衆教化に欠くことのできない、重要な教化資料となったものであり、民衆の生活のうちに根強く浸透していったのである。その一つの現われが大足宝頂山石刻の孝經典の雕像であるといえよう。

つぎに民衆における孝思想の浸透に大きな影響を与えたのは『孟蘭盆經』である。本經は『大正大藏經』第十卷に収められている、七百字あまりの短かい經典である。西晋の竺法護の訳となつてゐるが、恐らく中国で作成された疑經の一つであるように思われる。孟蘭盆の行事はすでに南北朝の頃から仏教の行事として盛んに行なわれており、祖先崇拜の行事と関連して受容されていた。この『孟蘭盆經』にもとづく変文が作られ、『目連救母變文』などが大きな役割を果したのである。

『孟蘭盆經』の注疏には唐の慧淨の『孟蘭盆經贊述』一卷（大正八十五卷）と、華嚴宗第五祖の宗密の『孟蘭盆經疏』があるが、宗密はその中で孝道について詳細に論じている。『孟蘭盆經疏』の冒頭では、

混沌より始まり天地を塞ぎ、人神に通じて貴賤を貫く、儒釈皆な之を宗とするは、其れ唯だ孝道か。孝子の懇誠、二親の苦厄を救い、昊天の恩徳に酬いるは、其れ唯だ孟蘭盆の教なり。（大正三十九・五〇五上）

と述べて、孝道こそ儒教、仏教を貫く永遠の理法であり、その孝の実践は『孟蘭盆經』の教説にきわまるという。ついで幼くして親と死別した自己の体験を語り、『孟蘭盆經』にめぐり会つて以来、毎年七月十五日には盆供養を営んできたが、いま求められてこの經の疏を書く、と述べて經疏を著わす因縁を明らかにしている。

本疏の上巻において第一教起所因が述べられ、經の成立の旨趣、目連濟母の故事、儒仏二教における孝道の内容、悲田、勝田の意義が明らかにされている。

この宗密の『孟蘭盆經疏』について、宋代になると、多くの注釈書が著わされた。その中の一つに、遇栄鈔の『孟蘭盆經疏孝衡鈔』（卅統蔵九四）がある。本書には孟蘭盆齋念誦式という壇式が付されている。宗密の疏を引文して、これに註解を加えたものである。

宗密の『孟蘭盆經疏』の中にも『父母恩重經』が引用（六）されているが、『孟蘭盆經疏孝衡鈔』の中にも引用（七）され

ており、『孟蘭盆經』と『父母恩重經』が仏教の孝思想を鼓吹する經典として表裏一体となっていたことがわかる。

さらに『孟蘭盆經』の講經文である『孟蘭盆經講經文』(潘重規編著『敦煌變文集新書』四八七―四九六頁)が敦煌写本(台北国立中央図書館蔵)として存在しており、『孟蘭盆經』もまた講經文として庶民の中に浸透していたことがわかる。『孟蘭盆經講經文』によると、『孟蘭盆經』が『孟蘭清淨經』(前掲書、四八七頁)と呼ばれており、また、その中には「父母恩重經云」として父母の十種恩が引用されており、歌曲『十恩徳』とともに『孟蘭盆經講經文』もまた流行していたことがわかる。

『孟蘭盆經』にもとづく孟蘭盆会が中国において最初に行なわれたのはいつであるかは不明であるが、竺法護訳の『孟蘭盆經』の訳出は三世紀後半であるので、孟蘭盆についての知識は古くからあったと思われるが、行事化されたのは南朝の頃と思われる。『仏祖統紀』^{二八}卷三十七には、大同四年(五三八)、梁の武帝が同泰寺に行幸、孟蘭盆齋を設けた記録がある。また『釈氏六帖』^{一九}卷二十二の「貯積秤量部」第四十五の「甕盆」の条にも「武帝送盆」があり、七月十五日の盆供養のことが記されているので、孟蘭盆供養は梁の武帝から始まったとみてよい。

唐代における孟蘭盆会の記録については、代宗代の記録がある。大曆三年(七六八)七月、代宗は特に章敬寺に孟蘭盆を大賜した。その時、寺院は新しくなり、勅命により百官が参詣して行香した。^{三〇}代宗はこの年正月にも章敬寺において行香し、僧尼一千人を度している。章敬寺は章敬皇太后のために建立された寺であったので代宗も章敬寺の行香に熱心であったと思われる。

代宗は章敬寺において孟蘭盆の法会を設けただけではなかった。大曆三年七月(『仏祖統紀』卷四十一、大正四十九・三七八下)、章敬寺に孟蘭盆会を設けた時と同じ月の七月十五日、内道場において孟蘭盆会を設けてい

る。この盂蘭盆会の儀式のために金翠をもつて飾り、費やした費用は百万といわれた^(三三)。代宗が行なった盂蘭盆会は特殊なものであり、一般の寺院で行なわれたものではないが、内道場や章敬寺で行なわれたことは、一般にすでに流布していたからこそ内道場においても採用されたのである。ついで徳宗は、貞元二年（七八六）、諸寺に盂蘭盆会を設け（『釈氏通鑑』巻七、正統蔵一三三・一三二上）、さらに貞元十五年（七九九）七月、安国寺に行幸して盂蘭盆供を設けた（『仏祖統紀』巻四十一、大正四十九・三八〇上）。

唐代に行なわれた盂蘭盆会の儀式やその内容については明確なことはわからないが、華やかなものであったことは推定できる。たとえば『法苑珠林』^(三三)巻六十二の「祭祠篇」に七月十五日の盆の献供について述べられているが、それによると、国家の大寺である長安の西明寺、大慈恩寺などには、口分田以外に別に勅賜の田荘があり、寺への供給物はすべて国家が供養し、毎年の盆の時には、種々の雑物や盆の音楽人などもすべて国家が供養したことがわかる。これは国立寺院ともいへべき西明寺や慈恩寺であったから国家の供養を受けられたのであろう。宋代以前の盂蘭盆会においては供仏、供僧が主であり、仏や僧に供養することが儀式の主眼であったようである。その華やかさについては、先に述べたように、金翠をもつて飾つたのであった。円仁の『入唐求法巡礼行記』巻四には、武宗の会昌四年（八四四）の盂蘭盆会の盛況をつぎのように述べている。

城中の諸寺は七月十五日供養す。諸寺は花蠟・花餅・仮花・菓樹等を作り、各奇妙を競う。常例として皆仏殿前に於いて鋪設、供養す。城を傾けて寺を巡り、随喜して甚だ是盛会なり。今年の諸寺の鋪設、供養は常年に勝れり。勅して諸寺仏殿の供養、花菓等は尽く般^(三三)びて興唐觀に到り、天尊を祭らしむ^(三三)。

諸寺は色模様をついた蠟燭や餅、造花、菓樹などを仏殿に供養したというから、絢爛たる供物が供養されたことがわかる。城中の人々が寺に集まり、盛会の情況が偲ばれる。廢仏政策を実行した武帝は、これらの供養物を

すべて道教の興唐觀に運ばせて天尊を祀らせたのであった。このように盛大に行われた盂蘭盆会は、その後、宋代になると祖先の靈魂を祀る儀式に変わっていったのである。

宋代に盂蘭盆会が行われたことについては、『仏祖統紀』卷四十五の熙寧八年(一〇七五)七月の条に、

八年七月。公卿朝士は盂蘭盆会を開宝寺に建つ、月の五日より始め十五日に至って畢る。主客楊傑は之れが記を為る。(三四)

とあり、七月五日から十五日の間、開宝寺において行われたことを示している。ただし、この盂蘭盆会は民衆とは関係のないもので、朝臣、官僚などによって行われたものである。

宋代の盂蘭盆会の儀式については、遇栄の『盂蘭盆経疏孝衡鈔』卷上に「七月十五日盂蘭盆念誦式」が引用されており、それによるとつぎのような儀式が行われていたようである。

出家の士、清規に具さに載る。在俗、高賢、当に此の式に依るべし。正月、必ず須らく塔寺に入り、大会を脩設すべし。

凡そ孝順の男女、生身の父母に報ぜんと欲せば、必ず預め七月初一日を始となし、毎日晨朝、然(燃)香奉供し、務めて精專に在るべし。小弥陀懺を修し、或は三十五仏を礼し、代りて存亡の父母の懺罪を為し、至りて速やかに無量光仏刹に

往かん。(三五)

これによると、出家者は清規によって盂蘭盆会を行うが、在俗者は七月一日より十五日に至る間、毎日燃香し供養品を奉じ、小弥陀懺を修したり、三十五仏の礼仏を行い、存亡の父母のために懺悔滅罪せよというのである。読誦の經典は『盂蘭盆経』であり、唱念は阿弥陀仏や観音、勢至の名号を唱えたようである。なお「報父母恩呪」なるものが収録されているので、この呪文も唱えられたのかも知れない。『盂蘭盆経』と『阿弥陀経』の読誦と三十五仏の礼仏と念仏往生が一体となって行われたのが宋代の盂蘭盆念誦式であったといえよう。

五代から宋代にかけては、『父母恩重経講経文』『盂蘭盆経講経文』などの講経文とともに、『十恩徳』『十種縁』

『孝順樂』などの歌曲が流布して民衆の中に仏教にもとづく孝思想が深く浸透していたことがわかる。最後に四川省大足県の宗教について、民国『大足県志』(一)卷三ではつぎのように述べている。

本県の宗教、旧に仏道二系あり。人民、両教一体に於て尊信し、並びに区別無し。^(三七)

仏道二教のみならず、多神を崇拜し福祐を祈るが、特に婦女子は観音菩薩を信じ、観音菩薩聖誕日の一月十九日、観音菩薩成道日の六月十九日、観音菩薩出家日の九月十九日には持斎を守り、そのほか観音明斎の日には、宝頂山の香火が盛んで、老幼を問わず近在の多くの参拝者が宝頂山の千手観音に参拝したという。

宝頂山は、観音の聖地として多くの参拝者が訪れたことは明らかであり、それらの参拝者は当然、父母恩重経変図や大方便仏報恩経変図などを見たのであり、それによつて父母に対する孝養の大切なことを教えられたのである。

註

(一) 四川省社会科学院・大足県政協・大足県文物管理所・大足県石刻研究学会編『大足石刻内容総録』(四川省社会科学院出版社、一九八五年五月)。

(二) 竜晦「大足仏教石刻《父母恩重経変像》跋」(『世界宗教研究』一九八三年第三期、一九八三年八月二五日、中国社会科学出版社)。

(三) 『十恩徳』は許国霖編『敦煌雜録』(上冊八七頁)、任二北校『敦煌曲校録』(一七二頁以下)に収録されているが、本論文では、任半塘編著『敦煌歌辭総編』(上海古籍出版社、一九八七年十二月、七四八―六六頁)に収録されたものを用いる。ちなみに本書には、『十種縁』『孝順樂』『求因果』『證道歌』『易易歌』などが収録されている。なお『十恩徳』の

研究としては、加地哲定『中国仏教文学研究』(同朋社出版、一九七九年十月、一九二頁)、沢田瑞穂『仏教と中国文学』(国書刊行会、昭和五十年五月、六七頁以下)がある。

なお『父母恩重経講経文』は『敦煌変文集新書』に収録されたものによる。

(四) 以下『十恩徳』『十種縁』『孝順楽』などの歌曲の文は『敦煌歌辞総編』に収録された歌曲文による。

(五) 王重民・王慶菽・向達・周一良・啓功・曾毅公編『敦煌変文集』下集(人民文学出版社、一九八四年、北京)六九五―七〇〇頁、および潘重規編著『敦煌変文集新書』(中国文化大学中文研究所、敦煌学研究会、敦煌学叢書第六種、中華民国七十二年七月初版)四四七―七七頁。周紹良・張涌泉・黄徵編『敦煌変文講経文因縁輯校』(江蘇古籍出版社、一九九八年十二月)六〇―一三七頁。

(六) 禿氏祐祥「父母恩重経の異本に就て」(『宗教研究』新第五卷・第四号、昭和三年七月)。

(七) 『開元釈教録』卷十八(大正五十五・六七三上)、父母恩重経一卷経引丁蘭畫黯郭巨等。故知人造三紙。

(八) 秦明智「北宋《報父母恩重経変》画」(『文物』一九八二年、第十二期)。

(九) 『賢愚経』卷一、須闍提品第七(大正四・三五六上―七中)

(一〇) 『仏祖統紀』卷四十五(大正四十九・四一三下―四上)

治平二年。勅大相国寺造三朝御製仏牙讚碑。翰林学士臣王珪撰文。左僕射魏国公臣賈昌朝書。右僕射兼訳経潤文使衛国公臣韓琦立石。太宗御製曰。功成積劫印文端。不是南山得恐難。眼觀數重金色潤。手擎一片玉光寒。鍊時百火精神透。藏処千年瑩采完。定果熏修真秘密。正心莫作等閑看。真宗御製曰。西方大聖号迦文。接物垂慈世所尊。常願進修增妙果。庶期饒益在黎元。仁宗御製。三皇掩質皆帰土。五帝潜形已化塵。夫子域中誇是聖。老君世上亦言真。埋軀祗見空遺冢。何処将身示後人。唯有吾師金骨在。曾經百鍊色長新。

(一一) 胡昭曦「大足宝頂山石刻淺論」(『大足石刻研究』六五—七頁)。

(一二) 民国『大足県志』(二)卷五、僧道伝

趙智鳳一名智宗。明鑑敗人。聖寿院碑記云。宋高宗紹興二十九年七月十有四日有曰趙智鳳者。生於米糧里沙溪。年甫五歲。靡尚華飾。以所居近有大仏巖。遂落髮剪爪。入其中為僧。年十六。西往弥牟。雲遊三晝既還。首建聖寿本尊殿。名其山曰宝頂。發宏誓願。普施法水。禦災捍患。德洽遠近。莫不皈命。凡山之前巖後洞。琢諸仏像。建無量功德。聖寿本尊者唐人。嘉州城北有樹。樹生癭久之癭。破出一嬰兒。州吏鞠為子。指柳為姓。修諸苦行。闡教弥牟。蜀王建召見賜以名位。称瑜伽部主総持王。相伝為毗盧仏。再世宋神宗熙寧間。勅号聖寿本尊。智鳳持其教故。亦称趙本尊焉。

(一三) 李正心「也談宝頂山摩崖造像的時代問題」(『文物』一九八一年第八期、「大足石刻研究」五七—八頁)

(一四) 道端良秀『中国仏教史全集』第九卷(書苑、昭和六十年十月)第五章「仏教の孝を説く經典」。ちなみに道藏の中にも『太上真一報父母恩重經』(第六五冊)、『太上老君説報父母恩重經』(第六六二冊)、『玄天上帝説報父母恩重經』(第六六三冊)などが収録されているので、仏道二教の『父母恩重經』について比較検討が行なわれている。秋月観暎「道教と仏教の父母恩重經—両經の成立をめぐる諸問題—」(『宗教研究』三九卷四輯、一九六六年三月)参照。なお本稿校正中に小川貫式氏の「大報父母恩重經の變文と變相」(『印度学仏教学研究』十三卷一号、昭和四十年一月。同氏著「仏教文化史研究」永田文昌堂、昭和四八年五月、収録)を拝読する機会を得た。甘肅省博物館蔵の「報父母恩重經變」は、あるいは『大報父母恩重經』の變文にもとづくものであるかも知れないので、今後、検討しなければならないと思う。

(一五) 岡部和雄「宗密における孝論の展開とその方法」(『印度学仏教学研究』第十五卷第二号、昭和四十二年三月)。

(一六) 『孟蘭盆経疏』卷下(大正三十九・五〇八中)

父母恩重經云。父母懷抱含笑未語和弄聲。飢時須食非母不哺。渴時須飲非母不乳云云。討論母恩昊天罔極。嗚呼慈母云

何可報云云。至於行來東西隣里井竈確磨。不時還家。母忽心驚。兩乳流出。卽知我兒家中憶我。即便還家。問詳此經文淺朴。偏誠貧賤之流何也。答君子自孝故。偏誠小人。又君子有簞瓢之貧。何妨確磨等事。又偏叙艱勤之語。始彰鞠養之勞耳。又云。其兒遙見母來。或在欄車搖頭弄腦。或復曳腹隨行嗚呼向母。母爲其子曲身下就。長舒兩手摩拭塵土。嗚和其口。開懷出乳。以乳乳之。母見兒歡。兒見母喜。二情相交恩愛慈重。莫復過是。

(一七)『孟蘭盆經疏孝衡鈔』卷一(正統藏九四・八〇〇上)

恩重經云。佛告大衆。人生在世。父母爲親。非父不生。非母不育。是以寄託母胎。十月懷身。歲滿月充。子母俱險。生墮草上。父母養育。臥在欄車。父母懷抱。含笑未語。和和弄聲。饑時須食。非母不哺。渴時須飲。非母不乳。子若饑時。嚙苦吐甘。推乾就濕。非父不親。非母不養。慈母養兒。去離欄車。十指甲中。食子不淨。子飲母乳。八斛四斗。故言云云。

(一八)『仏祖統紀』卷三十七(大正四十九・三五一上)。(大同)四年。帝幸同泰寺。設孟蘭盆齋。梵語孟蘭此云解倒懸。是目連尊者設此盆供。得脫母氏餓鬼之苦。

(一九)『釈氏六帖』卷三十二、貯積秤量部四十五、武帝送盆。弘明云。梁武每於七月十五日普寺送盆供養。以車日送。繼目連等。

(二〇)『冊府元龜』卷五十二、帝王部 崇釈氏二。七月特賜章敬寺孟蘭盆。時寺宇新成。帝增罔極之思。勅百官詣寺行香。

(二一)『旧唐書』卷一百十八、列伝六十八、王縉伝。代宗七月望日於内道場造孟蘭盆。飾以金翠。所費百万。なおこの記事は『大宋僧史略』卷中「内道場」の条(大正五十四・二四七下)、および『仏祖統紀』卷五十一(大正四十九・四五一上)にもある。

(二二)『法苑珠林』卷六十二(大正五十三・七五〇中)。

若是国家大寺。如以長安西明慈恩等寺。除口分地外別有勅賜田莊。所有供給並是国家供養。所以每年送盆献供種種雜物。及輿盆音樂人等。

(二三)『入唐求法巡礼行記』(『日仏全』一一三、遊方伝叢書第一、二六四上下)

城中諸寺。七月十五日供養。諸寺作花蠟花餅。飯花菓樹等。各競奇妙。常例皆於仏殿前。鋪設供養。傾城巡寺隨喜。甚是盛會。今年諸寺鋪設供養。勝於常年。勅令諸寺仏殿供養花菓等。尽般到興唐觀。祭天尊。

(二四)『仏祖統紀』卷四十五(大正四十九・四一五上)

八年七月。公卿朝士建孟蘭盆會於開寶寺。自月五日起至十五日畢。主客揚傑爲之記。

(二五)『孟蘭盆經疏鈔』卷上(正統藏九四・七四八上)

七月十五日孟蘭盆念誦式

出家之士。清規具載。在俗高賢當依此式。正月必須入於塔寺中。大會脩設。凡孝順男女。欲報生身父母。必預七月初一日爲始。每日晨朝然香奉供。務在精專。脩小彌陀懺。或禮三十五佛。代爲存亡父母懺罪。至速往無量光佛刹。白云。

我等同孝志。修行淨土因。報答二親恩。懺除三障罪。存者獲福壽。亡者得超昇。盡法界冤親。同生安養國。

舉孟蘭盆經畢。念阿彌陀佛眞金色云云。緊念阿彌陀佛百聲。觀音勢至清淨海衆各十聲畢。迴向云。

(二六)同(正統藏九四・七四八上)

報父母恩此世間有生無不從父母而得。能報此恩。及能慎終追遠。思無不報。

南無蜜栗多哆婆曳娑訶

(二七) 民国『大足県志』卷三、風俗

本縣宗教舊有佛道二系。人民於兩教一體尊信。拜無區別。更崇祀多神如禹王川主濂溪閔公等。皆客民遵其原籍風俗。歲時報賽以祈福祐者也。婦女尤篤信觀音菩薩相傳。歲之一月初九日六月十九日九月念九日爲觀音菩薩聖誕。無論老幼多於是日持齋極爲虔敬。明季寶頂山香火之盛。